6世紀後半の土器組成からみた石本遺跡

辻　本　和　美

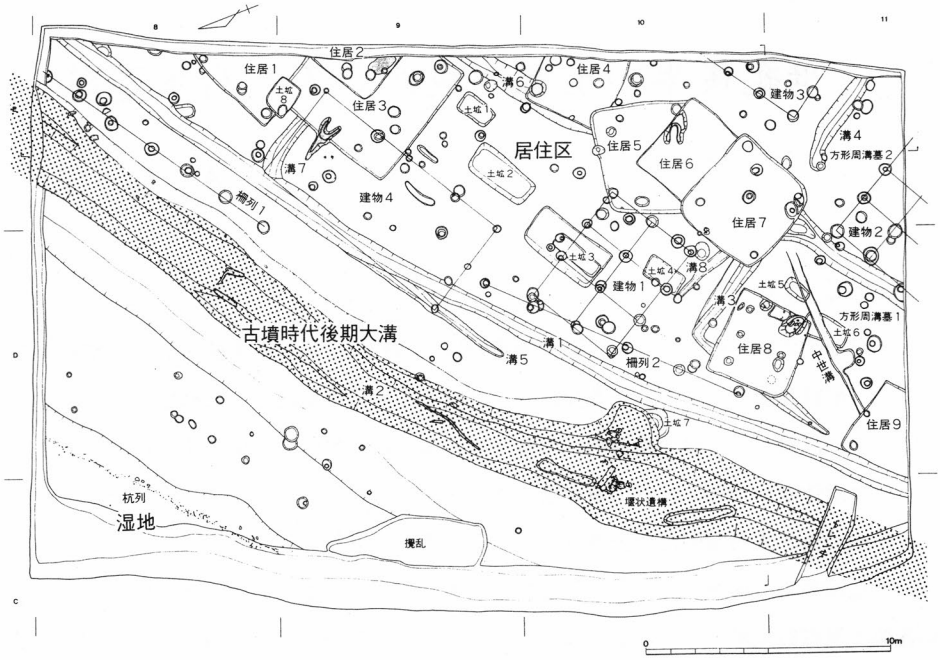
1　はじめに

5世紀前半にわが国にもたらされた須恵器は、当初は、その希少性の故に宝器的な扱いを受け一部首長層の墳墓への副葬品あるいは特殊な葬祭用儀器として利用されたにとどまった。これに対し、一般の集落内への普及は、須恵器の生産に直接たずさわった集落やそれらの生産体制を掌握した有力首長層の居住する集落を除いて遅れた。6世紀代になると全国各地で横穴式石室墳に代表される群小の古墳群が盛行するが、それに伴い墓室に須恵器を大量副葬する風習が広まり、須恵器の需要は爆発的に増大する。その要求に応えるべく各地に須恵器窯が築かれるようになるが、この生産量の著しい増加は、一面で須恵器本来の日常什器としての機能を再認識させる結果となった。このような6世紀以降の集落内での須恵器の受容は、これまでの軟質の土器を中心とする日常雑器の世界に、硬質という相反する性質をもつ器が共存するという、かって無かった一大変革をもたらしたが、これはその後永く日本の日常雑器の世界を規定することになった。[1]

しかしながら、一般集落で須恵器使用が定着する6世紀代については、その重要性と膨大な出土量に反して、集落内部での土器使用の在り方は不明な部分が多い。本稿では、6世紀代後半期に集落活動の中心を置く福知山市石本遺跡の事例をとりあげ、その組成や他の遺跡例との比較を通し、集落内での土器使用の在り方について眺めていきたい。なお、この小文を起こすきっかけは、表題とした石本遺跡の調査の際、出土した大量の須恵器類が古墳副葬品と同種の豊富な器種を含んでいたため、これまで漠然と古墳の副葬品としての認識が強かった須恵器について、日常の場である集落内ではどのように使われたのかということに興味をもったからである。

2　石本遺跡とその出土土器について

石本遺跡は、旧丹波国に属する京都府北部の福知山市牧に所在する複合集落遺跡である。遺跡は福知山盆地を形成する由良川とその支流である牧川の合流点に近い自然堤防状微高地に立地する。周辺には、総数30基前後の横穴式石室墳からなる牧古墳群が分布しており、築造時期や立地からみて本遺跡との密接な関係がうかがえる。1984年に鉄道建設に伴って



第１図　石本遺跡A地区遺構平面図

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施した[2]。検出遺構は、大きく２時期に分けられ、１期は、弥生時代中期の方形周溝墓や土坑群と同後期の円形竪穴式住居跡からなる。主題とする２期の遺構群は、古墳時代後期の集落跡で方形竪穴式住居跡(16基)の他、倉庫状の掘立柱建物跡・柵・大小の溝から構成される。集落は、先にふれたように微高地上に営まれているが、この集落の西縁を画すように幅約３m、深さ約１mを測る大溝(溝２)が緩やかなカーブを描いて走る。調査で確認した長さは40m程であるが、溝内からは、須恵器・土師器等の大量の土器類の他、木器、鉄器、石製品、土製品、骨角器、動・植物遺体など各種の遺物が出土し、また、堰状の板材と石組が遺存する。なお、この大溝の東側(住居跡側)には約３m離れて幅0.7m前後の溝が並行して走っており、両溝の間に土塁状の施設が構築されていたものと思われる。

本溝から出土した土器類は、直接住居跡に伴うものではなく、各個別の細かな所有関係を知る一等資料ではないが、集落と密接な関係をもつ位置からみて、集落内での総括的な土器使用状況をうかがう資料として捉えられる。これらの土器は、廃棄された状況を反映してか破片が多く、また、須恵器と土師器とでは硬度の違いにより破損度が異なるためそれぞれの正確な個体数を求めることは難しいが、凡そ第１・第２表のようであった。推計も含めると、須恵器と土師器の個体数の出土比率は４：６程度か、もしくは同率に近い数

第1表　石本遺跡大溝出土須恵器組成集計表

器種	杯	蓋	壺蓋	高杯蓋	高杯 有蓋	高杯 無蓋	甕	椀	台付椀	台付長頸壺
個体数	130 (177)	76 (272)	2	15	7	7	7	5	1	2
					14					
百分比	41.5	24.2	0.6	4.8	4.5		2.2	1.6	0.3	0.6

器種	短頸壺・直口壺	広口壺	小形壺	提瓶	すり鉢	横瓶	甕 Ⅰ	甕 Ⅱ	甕 Ⅲ	合計
個体数	10	12	2	6	1	9	5	15	2	314
							22			
百分比	3.2	3.8	0.6	1.9	0.3	2.9	7			100%

備考：杯・蓋(　)は，破片数。

値を示し、須恵器の占める割合が比較的高い傾向にあることがうかがえる。所属時期については、主体となる須恵器蓋杯の型式から、和泉陶邑編年Ⅱ型式3段階から同6段階に並行する時期が比定される。実年代については、現在のところ研究者によって型式の時期比定に若干の差異があり流動的要素が多いが、凡そ6世紀中葉から7世紀初頭ないし前半に位置づけられる[3]。なお細かくみると、須恵器蓋杯類では、3段階及び6段階の形態をとるものはごく小数しかなく、大部分は4・5段階のものが占める。以上から、大溝出土の土器群の所属時期は、時期編年の確立されていない当地域の土師器類を含め、大略6世紀後半期に中心を置くものと考えられる。

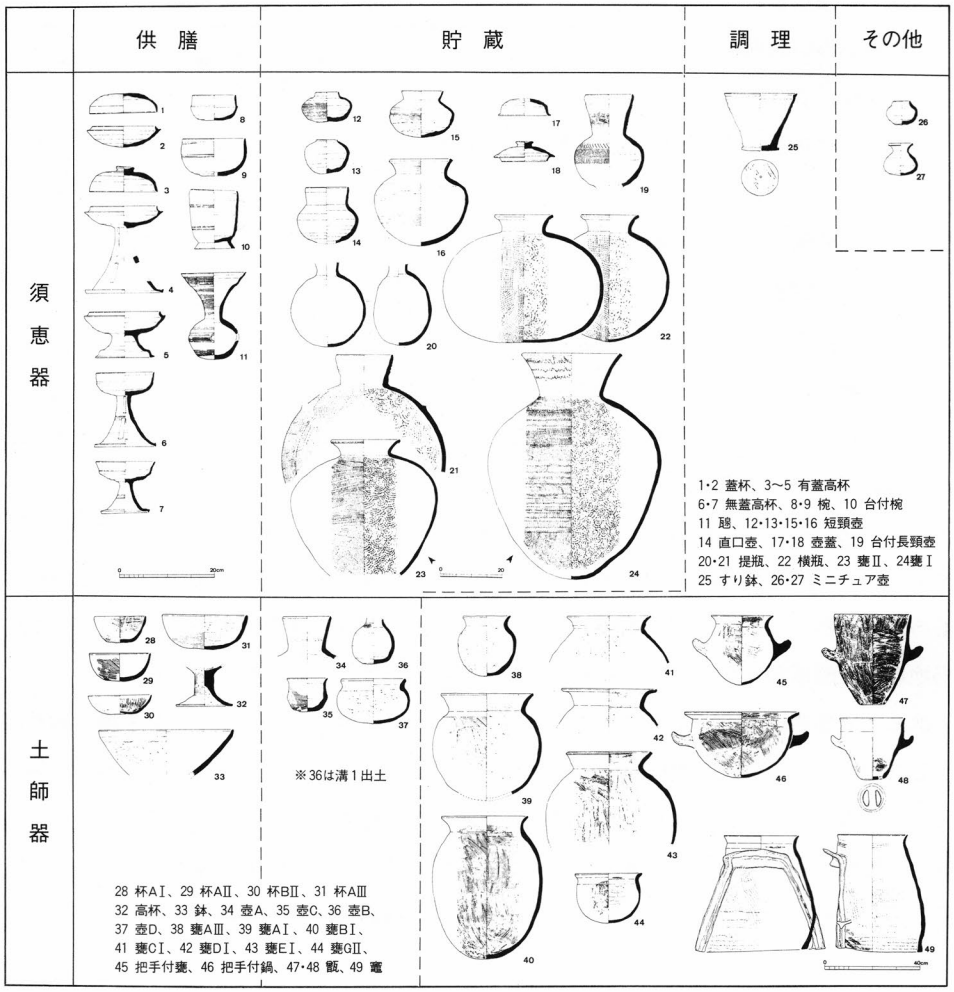
次に、器種構成についてみてみると、須恵器では、器台・装飾壺といった古墳の副葬品として用いられる特殊な器種を除き、当時期に一般的に認められるほぼ全ての器種が揃っている。器種構成比のうち最大のものは、蓋杯類で須恵器全体の63.7%を占める。これに高杯・椀類を合わせると70%強の割合になる。次に続くのは甕類で7%程である。これを用途別に分類すれば、大半がいわゆる供膳形態の器種が占める。須恵器における甕類は貯

第2表　石本遺跡大溝出土土師器組成集計表

器種	杯 A Ⅰ	杯 A Ⅱ	杯 A Ⅲ	杯 B Ⅰ	杯 B Ⅱ	杯 B Ⅲ	杯 B 小計	鉢	高杯	壺 A	壺 B	壺 C	壺 D	壺 小計	
個体数 ( )破片数	1 (5)	7 (65)	3	1	9 (55)	1	22 (125)	1	12	2	1	1	2	6	
百分比	0.4	2.7	1.2	0.4	3.5	0.4	**8.6**	**0.4**	**4.6**	0.7	0.4	0.4	0.7	**2.2**	

器種	甕 A	甕 B	甕 C	甕 D	甕 E	甕 F	甕 G	甕 H	甕 不明	甕 小計	把手付甕・鍋	甑	竈	合計
個体数 ( )破片数	40 (165)	50 (249)	10 (43)	10 (75)	7 (36)	(11)	(13)	(13)	(256)	200以上 (861)	4 56(把手数)	6 (39)	6～7 (184)	260以上
百分比	15.4	19.2	3.8	3.8	2.7					**77.7**	**1.5**	**2.3**	**2.7**	**100%**

備考　1. 個体数で取り上げたものは，残存状態の良いもののみ。
2. (　)破片数は，口縁部破片の数量である。
3. 甕の個体数の計測については，口縁部破片の合計長から，完形品の口縁円周を割ったものから類推した。概数。
4. 比率については，ある程度個体数の判明したものだけを取り上げた。概数。実際の甕の比率はもっと高い。



第２図　石本遺跡大溝出土土器構成図

蔵形態に含まれるから壺類を含めた残りが貯蔵形態であることになる。

土師器については破片が多く数値で表すのは難しいが、甕類を中心とする調理(煮沸機能を含めた全般)形態の器種が、９割以上の高率を占めるものとみられる。これに対して、供膳形態の杯・高杯類の占める割合は低い。土師器の供膳容器の相対的な減少は、須恵器導入以後の器種変動のなかで最も顕著な現象とされているが、ちなみに、当地域の須恵器受容直後の時期(５世紀後半)に属する丹後の大宮町谷内遺跡SH15住居跡では形態の分かる約30個体の出土土器のうち、高杯・器台・杯類等の供膳土器は約半数を占めていた。[4] 石本遺跡での土師器杯類は、鉢形に近かった５世紀代のものに比べ浅くなる傾向があり、また、須恵器杯については口径の寸法が、ほぼ均一的であるのに対し、土師器杯では口径の

異なる3種の形態がみられる。このような同一器形で法量の異なる器種が作られるのは7世紀に入って増加するが、この傾向はこの時期に始まるものと言える。この他、珍しい器種として移動式竈がみられる。今回、石本遺跡で検出した住居跡の多くは周壁の一辺に造り付けのカマドを築いており、日常の煮炊はこれを利用したと考えられる。移動式竈(韓竈)は、これまで説かれているように、祭祀儀礼に用いられたものと想定される[5]。これについては、大溝出土遺物の性格と関係するので後ほど改めてふれてみたい。

3　6世紀後半期所属遺跡の土器組成について

前節では、石本遺跡大溝出土の土器類について、その組成を中心に一瞥した。ここでは、これらの資料を検討する前提作業として、同じく6世紀後半段階における各地の集落遺跡や古墳での在り方をみていくことにしたい。

当時期の集落遺跡から出土する須恵器と土師器の共存関係については、森浩一氏による各地での分析があり[6]、おおむねそれによって全体の傾向を知ることができる。一般に畿内の集落遺跡では、土師器に対する須恵器の割合は他の地域に比べ高率であるとされる。これに対し、関東や東北地方では、須恵器出現以後にもかかわらず須恵器を伴わない住居跡のほうが一般的であり、須恵器生産地帯から遠ざかるにつれて各住居内での須恵器の逓減の状態がうかがわれるとされる。以上の説明で要点は尽くされているが、もう少し具体例によって、畿内の集落遺跡での須恵器と土師器の在り方についてみておきたい。集落遺跡全体での土器の組成等については、大阪府西浦橋遺跡・同大平寺遺跡の調査報告書に和泉地域の状況が分析されている[7]。和泉地域は、全国最大規模の須恵器生産地である陶邑窯跡群を控えており、畿内のなかでも集落内への須恵器の導入が特に早かった地域である。それによれば同地域の石津川流域では、5世紀後半から6世紀中葉にかけての集落内での須恵器と土師器の構成比は、ほぼ8：2であるとされる。比較時期が本題とする時期よりやや遡るにもかかわらず、須恵器が圧倒的な優勢を示す。これについては陶邑窯跡群を含む当地域の特異性によるものともみられるが、中・北河内地域の集落遺跡や、森氏の報告にもある摂津地域の難波宮下層遺跡でもほぼ同様な比率を示しており、畿内中心部の6世紀段階の集落では、一般的な傾向として差しつかえないものと思われる。須恵器の器種組成では、いずれの遺跡でも蓋杯類が全体の7～8割強を占め、他の器種を圧倒する。また、古墳と同じ器種が集落内から普遍的に出土するのも当地域の特徴とすることができよう。

畿内周辺部の香川県下川津遺跡[8]は、西日本でも有数の古墳時代後期の集落遺跡であるが集落内を流れる多数の溝の一つSD8704から出土した土器の比率は、須恵器70個体以上に対し、土師器は50個体以上を数えると報告されている。住居跡での数値ではなく、比較資

料としては適切ではないが、凡そ畿内の場合と同様な須恵器優位の傾向がうかがわれる。本遺跡では、土器類を大量投棄した溝が検出されており、須恵器の器種についても台付長頸壺をはじめ豊富な器種がみられるなど、石本遺跡と共通する点が多く興味深い。

一方、畿内を離れた地域では、土師器に対する須恵器の共存率は畿内に比べ著しく低い。具体的な数値については森論文に掲示された関東地方でのいくつかの集落跡住居内での土器遺存例によって明らかであり、最近の調査例でも大きな変化はない。例えば、186基にのぼる住居跡が確認された千葉県日秀西遺跡[9]では、遺物の残りが最も良かった009住居跡から出土した80個体の土器のうち須恵器は5個体(6%)を数えるのみであった。このうち最も多い器種は須恵器を模倣した土師器杯で、全体の40%強を占める。次は土師器甕で約20%である[10]。すなわち、ここでは畿内の集落遺跡でみられる須恵器蓋杯の役割を土師器の杯が果たしている格好になる。日秀西遺跡の住居跡から出土した須恵器の大半は蓋杯であるが、なかには𤮔・提瓶等を持つ住居もみられる。このように、一例として上げた日秀西遺跡の場合でも、容器全体に占める須恵器の割合は低率であるが、本遺跡については、大型住居跡の存在や鉄器・土製祭祀遺物等の豊富な出土状態からみて有力な地域集落と位置づけられるので、本例以外の集落での在り方も凡そ推し量ることができる。関東地域で、当時期に普遍的に見られる、須恵器の杯身を模倣した鬼高式土師器杯については、須恵器供給の絶対量の不足が産み出した産物であるとされているが、杯類の多用化は畿内と同一の動きが東国にも及んだためであろう。畿内及びそれに準じた須恵器生産地では、既に日常什器の場に定着して久しい須恵器も、それから離れた地域ではやはり希少価値の高いものであり、什器とはいえその使用は日常的な場と異にするものと思われる。畿内を離れた周辺諸地域で6世紀段階に始まるとされる須恵器生産の拡大も、その意図するところの多くは冒頭にも記したように、この時期に盛行する群集墳への副葬用須恵器の供給にあったものと考えられる。

次に、同じく土器の消費に係わる遺跡である古墳の場合についてみて行きたい。繰り返すように6世紀後半は全国的な規模で群集墳が築かれる時期であり、集落遺跡の場合と比べて資料には事欠かない。この時期の古墳出土の須恵器の器種組成については、生産地である窯跡との流通の観点から、中村浩氏[11]によって詳しく論じられているので、それを参考にみて行きたい。中村氏の提示された、奈良県天理市ホリノヲ古墳群及び大阪府高槻市塚原古墳群の場合、調査された全古墳から出土した須恵器の器種組成比では、蓋杯類がもっとも多く、次に高杯、壺類の順であった。これに対し、同じ時期(Ⅱ型式3～6段階)の陶邑窯跡群では、生産器種の比率は蓋杯が41.4%と圧倒的に多く、次に甕31.1%、壺3.3%、高杯0.95%、以下𤮔、皿、鉢、平瓶、提瓶の順となり、古墳出土の須恵器組成と一致した

傾向がうかがわれるとされている。同じく古墳から出土する須恵器と土師器の比率については、塚原古墳群の例が当時期の一般的な在り方として参考になる。塚原古墳群[12]で調査された30基の古墳から出土した土器類は全体で250点にのぼるが、このうち須恵器は227点、土師器は23点で、その比率は9：1である。この比率は他の地域でもあまり変わらないようで、例えば、石川県羽咋地域では、調査された54基の後期古墳から310点の土器が出土したが、このうち、282点(91%)が須恵器で、土師器は残り28点(9%)を占めるにすぎないとされている。古墳に伴う土師器の器種についても、杯・高杯等の供膳形態のものが大部分で、甕・甑といった煮沸形態のものはほとんど見られない[13]。この事実から資料を分析された河村好光氏は、横穴式石室に伴う儀礼行為の中心は食物の供献であり、墓前炊さん等の行われた可能性は少ないことを論証されている。一石室に210点余りという多量の須恵器を副葬していた京都北部の久美浜町湯舟坂2号墳[14]でも、土師器は椀3点と杯1点の計4点を数えるにすぎず、この時期、死者の埋葬にあたっていかに須恵器が多用されたかがうかがえる。

以上、当時期の須恵器と土師器について、主にその共存関係を眺めてきた。要約すると、畿内の集落遺跡では須恵器の使用比重が大きく、器種では蓋杯の占める割合が著しく高いことがわかる。これは古墳や生産遺跡である窯跡でも一致し、関東地域をも含めた汎日本的な傾向であるといえる。当時期の思想を反映した供膳行為の増加によって、集落内外で杯類が多用な使われかたをされたことを物語るものである。集落内での容器保有の実態については、集落構造の研究自体がようやく進みだしたのが現状であり不明な部分が多く今後の課題とするところが多い。

4　石本遺跡大溝出土の土器の性格

石本遺跡の大溝から出土した大量の土器類、特に須恵器類については、全てが日常の什器として使用されたものかどうか当初から疑問に感じていた。大溝出土土器の器種組成については、前節でみたように和泉地域の例は特別としておおむね畿内での在り方と一致しており、当時期の集落遺跡として一般的な傾向を示すものとも思われる。しかし、今回、丹波地域での例については良好な資料がなく比較できなかったが、石本遺跡での須恵器の質・量の豊富さは同地域においては他に類例の少ないものである。大溝からは、これらの土器類以外にも前述したように多彩な遺物が出土している。このうち、木器については、農工具などの実用品と共に舟形・刀子形・馬形・修羅形等の形代類が比較的多く認められ、また、生贄として祭りに供せられたとされるウシ・ウマ等の獣骨、その他、骨角器・手捏土器、さらには移動式竈等、祭祀的色彩の濃い遺物が多数存在することが注意される。

河川に関係する祭祀遺跡や遺構は、古墳時代前期から各地でその事例が認められ、発掘調査では、川岸や溝縁辺での遺物の集中あるいは川・溝内への遺物の投棄という状況で検出される。祭祀の対象となる河川には、自然の河川と人為的な溝(人工流路)との二者があるが、いずれの場合にもその行為は、集落や水田等を洪水から守り繁栄と豊穣を祈る水霊信仰に根ざしており、広義の農耕祭祀として位置づけられている[15]。これらの祭祀に伴う遺物構成の変遷をみると、5世紀代には手捏土器や土製や石製の模造品等を多用するが、6世紀段階には祭祀遺物の伴出は減少し、それに反して須恵器を主体とする大量の土器類や煮沸具を伴う事例が増加する傾向がある。すなわち、前者では、神を迎えるための幣帛の奉献が主体であるのに対して、後者では、甕・杯等の什器類を多用しさらに煮沸炊飯を伴う儀礼行為の存在がうかがわれる。これは石本遺跡から出土した土器類の性格を検討するうえに大きく示唆するものであろう。古墳時代における水辺の祭祀を詳しく分析された出原恵三氏は、遺跡から復原される上記の儀礼行為を、律令時代における春秋二度の予祝・収穫祭に係わる村落祭祀「春時祭田」に系譜的につながる祭祀あるいはその原形として位置づけておられる[16]。「春時祭田」については、断片的な文献資料から次のような儀礼行為が復原されている。すなわち「自然のもたらす豊穣への感謝として初穂・御酒などを大甕に盛り神に捧げ、そののち、これらの供物を調理し皿・杯に移し、神からの下賜品として村落の構成員に分配し共に飲食饗宴する」という祭礼の姿である。出原氏は、古墳時代の村落祭祀との類似性から、律令制下の村落祭祀と公出挙制の関係を明らかにされた義江彰夫氏の優れた論考[17]を基に「8世紀以前に存在していたと考えられる在地村落における春時祭田の祭祀方式を律令国家が吸収し国家統制の中に変質させ組み込んでいった」とされ「律令制下の祭祀形態の中には律令以前の村落祭祀の形態が投影されている」と論及されている。このことに関しては、石本遺跡から出土した木製馬形代の問題がある。木製馬形代は7世紀末ないし8世紀初頭に始まる律令的祭祀に伴う遺物であり、それより年代的に遡る本例に対し疑念がもたれている[18]。しかし、これについては溝の埋没状況や供伴する須恵器蓋杯の型式からみて少なくとも7世紀初頭以降には下らないものと考える。同じ溝内からは犠牲獣と考えられるウマ・ウシの歯骨が出土しているが、殺馬・殺牛の例も早く古墳時代中期には畿内の村落内で行われていた豊穣・用水確保の農耕祭祀儀礼のひとつであり、その代用品である土馬信仰と共により祭政一致的な律令制下の祈雨信仰として受け継がれていくとされている[19]。また、祭りを演出する祭具のひとつであった移動式竈が、食物供献の象徴としての仮器(雛形)に移し変えられていくのも同様な現象であろう。すなわち、上記の事例は、古墳時代に畿内周辺の村落共同体内部の農耕祭祀としてとり行われてきた儀礼行為及び祭祀具の一部を、律令国家がその祭祀体系(律令的祭祀)の中に取り込んでいっ

たことを物語るものであり、従来の祭祀具も、中国の文化思想の影響と都市生活の発展に伴い、都城やそこに生活する人々の招福・除災(祓)の呪術具に変容していったものと思われる。[20]

先にみたように村落内で行われた祭祀には大量の須恵器を伴う例が多いが、祭祀を執行するに当たっては、それらの供給を可能とした交易の発展と経済力の裏付けが不可欠の条件であったものと考えられる。すなわち、畿内の集落をして律令的祭祀の萌芽となるような新たな祭祀形態を産み出していった背景には、前述の条件が完備していることと共に、群集墳の盛行にみられるような氏族共同体成員間の階層の分化と自立化に対応する、新たな共同体的紐帯を基盤とする秩序の再編成が必要であったためと想定される。

石本遺跡に戻って考えれば、その祭祀形態も単一ではなく在地的な様々な要素を含んだものと思われるが、いち早く畿内地域と共通する祭祀儀礼を取り入れた原因については、畿内政権と緊密に結びつくことにより新たな技術や思想を導入し、それによって農業生産の増大と村落共同体成員間の統率を計ろうとした在地首長層の要請にあったものと思われる。また、畿内からみて本遺跡が但馬・丹後等山陰への分岐点に当たる交通の要衝に位置していることは、畿内側からの能動的な動きも考慮されよう。

なお、当時期の古墳副葬品と集落出土の須恵器の器種組成が近似することは前に触れた。これは、村落内で葬送に伴う一部の儀礼行為が行われていたことを予想させるが、憶測を重ねるばかりなのでここでは以上で留めておきたい。

5　まとめにかえて

6世紀中葉から7世紀初頭は、群集墳の盛行から消滅へという現象に示されるように日本の歴史上でも大きな変動の時期であり、古代国家成立過程の重要な位置を占めている。石本遺跡を見下ろす丘陵上に分布する総数約30基からなる牧古墳群[21]は、沖積平野を臨む台地先端に築かれた全長約35mの前方後円墳である牧正一古墳の築造を契機とし、約半世紀にわたって順次築造されていく。これら群集墳の被葬者は、石本遺跡にうかがわれる大規模な用排水溝の掘削やU字形鉄製刃先を装着するナスビ形鋤等の新型農具の導入によって、由良川低地部の水田開発にある程度の成功を収め私財の蓄積を得た村落共同体の族長及び家父長層とその家族に比定されるが、これらの古墳被葬者のもう一つの側面は、前節で述べてきたような共同体的紐帯を基盤とする村落祭祀の主宰者の姿であった。石本遺跡の古墳時代集落は、大溝の埋没と共にその終焉を迎え、それと時を同じくして牧古墳群の築造も終わりを告げる。その後の石本集落の動向については、不明である。

(つじもと・かずみ＝当センター)

1　須恵器については、次の論文を参照した。
　a.　田辺昭三『陶邑古窯跡群』(平安学園考古学クラブ)　1966
　b.　原口正三『日本の原始美術４　須恵器』講談社　1979
　c.　中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房　1981
　d.　田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981
　e.　西弘海「土器様式の成立とその背景」(『土器様式の成立とその背景』真陽社)　1986
2　辻本和美・竹原一彦・小橋拓司『京都府遺跡調査報告書　第８集　石本遺跡』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1987
3　須恵器の時期編年については、中村編年(注１c)に拠る。
4　細川康晴「谷内遺跡第４次」(『京都府遺跡調査概報　第28冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1988
5　稲田孝司「忌みの竈と王権」(『考古学研究』25-1　考古学研究会)　1978
6　伊達宗泰・森浩一「土器」(『日本の考古学』古墳時代下　河出書房新社)　1966
7　石神怡「まとめ―周辺遺跡との関連において―」(『府道泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』(財)大阪文化財センター)　1984
8　香川県埋蔵文化財研究会『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(Ⅸ)下川津遺跡』　1988
9　清藤一順・上野純司『千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』　千葉県教育委員会・財団法人千葉県文化財センター　1980
10　石野博信「古代住居の日常容器」(『橿原考古学研究所論集　第六』吉川弘文館)　1984
11　中村浩「須恵器の生産と流通」(『古代窯業史の研究』柏書房)　1985
12　注１b論文　67頁158表参照。
13　河村好光「後期古墳の編成秩序とその展開」(『考古学研究』27-1　考古学研究会)　1980
なお、後期古墳に伴う土器の性格については、亀田博「後期古墳に埋納された土器」(『考古学研究』23-4　考古学研究会)　1977
14　奥村清一郎・新納泉ほか『湯舟坂２号墳』　久美浜町教育委員会　1983
15　亀井正道「海と川の祭り」(『古代を考える　沖の島と古代祭祀』吉川弘文館)　1988
16　出原恵三「祭祀発展の諸段階―古墳時代における水辺の祭祀―」(『考古学研究』36-4　考古学研究会)　1990
17　義江彰夫「律令制下の村落祭祀と公出挙制」(『歴史学研究』380号)　1972
18　金子裕之編『律令期祭祀遺物集成』　1988　及び同氏「日本における人形の起源」(『道教と東アジア―中国・朝鮮・日本』人文書院)1989　なお、７世紀初頭以前に遡る木製馬形例は静岡県神明原・元宮川遺跡、石製馬形例は群馬県長根羽田倉遺跡等がある。
19　土肥孝「日本古代における犠牲馬」(『文化財論叢』同朋舎)　1983
20　律令的祭祀については、金子裕之「都城と祭祀」(『古代を考える　沖の島と古代祭祀』吉川弘文館　1988)ほか一連の論考、水野正好「祭祀と儀礼」(『古代史発掘10』講談社　1974)を参照。
21　梅原末治「牧の石室古墳」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第20冊　京都府)　1940
西岡巧次・村川俊明「牧古墳群」(『丹波の古墳Ⅰ』山城考古学研究会)　1983